



童話的世界

峯村 明

童話的世界

私はアプリーシャ

春の贈り物

月の夜想曲

長い夜のすごし方

よくばりな犬

聖夜の魔法

七人の妖精のぼうけん

あとがき

童話的世界

私はアプリーシャ

はじめまして。私の名前はアプリーシャといいます。みんなとおなじ十一歳。

川の向こうに、たくさんのりんごの木に囲まれた、小さな一軒家があるでしょう？ 魔女が住んでるっていうウワサがあるおうちです。あそこへ引っ越してきました。住んでるのは魔女じゃなくて、私のおばあさんです。おばあさんはずっと一匹の年取った黒猫と暮らしていました。でも、都会に住んでいた私たちが父のお仕事で遠い外国へ行くことになり、みんなが行ってしまうなんてちょっとさみしいよ、と手紙をくれたので、私はおばあさんと暮らすことにしたのです。

私はりんごの木がたくさんあるあのおうちが大好きだったので、引越しはとてもワクワクしました。ハウキ、いえ、飛行機で空を飛ぶよりも、ずっと。この学校に通うのも、とても楽しみでした。だって、学校に通うのは初めてだからです。私とおなじ十一歳の子供たちは学校でどんなことを勉強しているのかな、な

にをして遊んでいるのかな、どんなお友だちができるかな、ワクワクドキドキして、夕べは眠れませんでした。

私の好きなものはね、真っ赤なりんご、ちょうちょとみつばち、シロツメクサ。今まで暮らしていた都会には、りんごの木も野原もなかったの。だからこの学校をひとめで大好きになっちゃった。だって、シロツメクサでいっぱい、野原のまんなかにあるんですもの！ あんまりステキだから、私は、ちょっと待って、アプリーシャ、って思いました。初めて通う学校だから、私を喜ばせようとして、おばあさんが魔法を使ったんじゃないかしら？

おばあさんは、「ばかなことをお言いでない」と言ったわ。「あの学校は、ばばが生まれる前からあそこにあるんだよ」、ですって。シロツメクサの野原も、ずっと変わってないんですって。三百年変わってない学校で勉強できるなんて、やっぱり、ワクワクしちゃう！

でも、にがてなものもあるの。それは、イモムシさん。ちょうちょは大好きだけどイモムシさんはにがてなの。いつかお友だちになれるかな、なれたらどんなお話を聞かせてくれるかな。

その前に、みんなとお友だちになって、いろんなお話をしたいな。こんな私ですけど、どうぞよろしくね。

春の贈り物

芽吹いたばかりの柳の枝先に、真っ青なリボンが結んでありました。

男の子は、なんだろう、と思って、立ち止まりました。かたわらをかけぬけていったともだちが、少し先でふり返りました。「早く行こうよ！ 公園、とられちゃうぞ！」

青いリボンが気になった男の子は、「うん……」と生返事をしました。それから、かかえていたサッカーボールをともだちに放りました。「ごめん！ 先行ってて」

「えええー？」 「ごめん！ すぐ行くから！」

ともだちは飛んできたボールをうけとめながらちょっと不満げに言いました。「すぐ、来いよー」

柳の枝がさわさわと揺れていました。誰が青いリボンを結んだのでしょうか。柳の木はとてもとても大きくて、男の子が住んでる三階建てのアパートと同じくらい、高いのです。三階の窓あたりの高さのところで、ちょうちょ結びのリボンがひらひらとしていたのです。

誰かが高いはしごを使って登っていったのでしょうか。そしてつやつやと青いリボンをきれいにちょうちょ結びにしたのでしょうか。

そこで男の子は（待てよ）と思いました。きれいに結んであったリボンが、どこからか風で飛ばされてきて、柳の枝にひっかかったのかもしれない、と思い当

たったのです。ちょうちょ結びは、風に吹かれているうちにきつとぐうぜんにできあがったのです。

きつとそうです。なんといっても、そう考えるのが、合理的で、現実的でもあります。

リボンを見つけたときのどきどきはみるみる消えていき、男の子はなんとなくがっかりして枝をみあげるのをやめました。それから、先に公園へ向かったともだちを追いかけて行きました。

男の子がいなくなったとたんのことです。（ちえ）と小さな舌打ちが聞こえました。

いったい誰でしょう。

あなたの聞き間違い？

いいえ。

ほら。見てください。ひらひらしていた真っ青なリボンが——くねくねくねくね——なんだか、生き物みたいに動いています。

リボンはくねくねした動きで枝に巻きつき、巻きついたかと思ったら、柳の枝と見分けがつかなくなってしまいました。でも、よくよく見ると、なおもくねくねと動いています。もっとよくよくみると——それは、シマヘビの子どもなのでした。

シマヘビくんはするすると枝に沿って動きながら、また（ちえ〜）と舌打ちしました。（せっかく、いっしょに遊ぼうと思ったのに……!）

じつは昨日の夕方。シマヘビくんはうっかり川に落っこちてしまい、水に流されているところを助けられたのです。助けてくれたのは、そう、さっきの男の子。男の子はシマヘビをそっとやわらかな草の上において、「もう川に落っこちないように気をつけるんだよ。じゃあ。ぼくはサッカーしに行くから」それだけ言ってさっさと行ってしまったのです。お礼をいうひまもありませんでした。

なんとかお礼をいいたいシマヘビくんですが、枝に巻きついていれば枝のような色に、地面を這っていればその地面の色に、体の色が変わってしまいます。鳥や人間などに感づかれなためです。これではお礼をいおうにも、気づいてもらえません。

悲しくてめそめそ泣いていると、春の妖精がやってきて尋ねました。「なにが悲しくて泣いているの？」シマヘビくんは涙をふきふき、「あのね……」と話し始めました。

話を聞き終えた春の妖精はふわりふわりと漂いながら、「それは悲しいわねえ」と同情しました。

「いちどだけ、あなたに魔法をかけてあげましょう。男の子がきっと大好きな真っ青な色。その色のリボンに変身すれば、男の子は、きれいだなあ、と興味をひかれてリボンを手にとるでしょう。そうすればお礼が言えるでしょう。いっしょに遊ぶこともできるでしょう。でも、いい？ いちどだけですよ」妖精はそ

う念を押しました。

男の子がきれいでやさしいリボンに気づいてくれますように。妖精とシマヘビくんはいっしょにそうお祈りしました。でも男の子は、リボンに気づいたけれども、すぐに行ってしまいました。

青いリボンではなくて、シマヘビのままの姿だったら、とシマヘビくんは考えました。でも、それだと、シマヘビは周りの色に溶け込んでしまい、気づいてもらうことはできないのです。

(しかたがないよね……) シマヘビくんの目から涙がこぼれました。

次の日。男の子がひとりで柳の木のそばへやってきました。手に持っているのはサッカーボールではありません。スケッチブックとクレヨンです。紙いっぱいの緑色の柳の木、そして片隅にちょうちょ結びの青いリボンを描き加えました。気持ちよく吹きつける風を、男の子は胸いっぱいに吸い込むのでした。

月の夜想曲

静かな、気持ちのいい宵。月は散歩に出かけることにしました。

藍色の空にのぼってみると、空気は澄んでいて空の果てまでも見渡すことができました。こんなに天気の良い晩なら、どこまでも歩いていけそうだと、月は思いました。

まず、東の天のペルセウスのところで最近の武勇伝を聴き、それから南の天に住んでいるペガサスと、今宵は語り明かそうか……

星々のみごとな景色に気をとられていた月が、ふと足元をみると、きらきらときらめくものがあります。藍色の水面でした。そこに、さわさわと風が吹きました。藍色の水面にもさざなみが立ちます。

「ああ！」と、月の口からため息がもれました。

あそこにいるのは、なんてきれいなひとだろう！ ゆるやかになびく金色の長い髪。金色の横顔、丸い頬。まろやかな曲線のしなやかな手と脚も、まとっているドレスも金色です。空の彼方に輝く星々に負けない美しさではありませんか！

娘は踊っていました。どこからともなく聞こえるゆっくりしたテンポの曲に合わせて、両手を広げ、ゆっくりと回っているので、月の目には湖の上に金の円盤が踊っているようにみえました。

ひと目で、月はその金色の娘に夢中になりました。そして我を忘れて言いまし

た。

「おじょうさん。いっしょにおどりませんか？」

娘は金色の瞳で月を見上げ、はずかしげにうなずきました。おずおずと手を取りあったふたりはぎこちなく湖の上にステップを踏み出しました。娘の足取りは軽く、宙を舞うよう。一步踏み出すごとに湖に波紋が生まれ、音楽が生まれます。

娘の髪が揺れると金の光が流れ、金色の薄いベールを何枚も重ねた娘のドレスがひるがえると、あたりは宝石の粉がこれでもかとまかれたように、光であふれました。目くるめく美しい音楽があふれました。気がつけばそれは娘のくちびるが歌う、彼女の歌でした。娘がほほ笑むと、月は天にのぼったみたいに幸せな気持ちになりました。

月は弾む息をおさえ、高鳴る胸に手を当て、娘にささやきました。

「あなたの名前を教えてくださいませんか？」

娘は答えようと愛らしいくちびるを動かしかけました。にわかには、灰色の雲が忍び寄ってきて、月の目の前をおおいました。

「おじょうさん！」月が叫んだときには、金色の娘の姿は雲にかくれて、見えなくなっていました。

長い夜のすごし方

ウサギの仕事はお餅つきです。ずっと昔から毎晩毎晩つき通しでしたから、とうとう腰が痛くなりました。たまにはひと休みしようと、ごろんと横になってみたものの、月の夜は長くて、ひまでしかたがありません。

退屈していると、若い男の人がたずねてきて、「私は電気屋です」と名乗り、「地球の甥ごさんからテレビをお届けするように頼まれました」と言いました。「ところが、テレビを入れた箱が運送中に行方不明に。そこで私だけやってきたというわけです」

「それはそれはご苦労さま」と、ウサギはお茶とあんころ餅でもてなします。「ところで、『テレビ』で、餅よりうまいのかね？」とたずねると、電気屋さんはお餅をのどに詰まらせました。

「テレビをご存知ないのですか！？ テレビでよくコマーシャルやってるじゃありませんか！ 甥ごさんから、最新式の自家発電機付きのをこちらに届けるように、と頼まれました。それですと、災害地や電気のない無人島でも、月でも、テレビをみることができるのです、素晴らしいでしょう！？」

ウサギはお茶を飲みながら「はあ」と相づちを打ちました。「素晴らしい物らしいね」

「それはもう素晴らしいのなんの！ こう、四角い枠の中に、いろんなものが映

るんです。きれいな地球の風景なんかはもちろん、狼が雪原をかつこよく走ってるところや、満月に向かって朗々と遠吠えする声も臨場感まんてん。あ、狼はお嫌いでしたっけね。あとは歌にドラマにニュースにスポーツ中継、お買い物。なにしろ、テレビさえあれば退屈しません。一生楽しく暮らせるのです！」

あまりにすばらしい話に、ウサギは長い耳を傾けて身を乗り出し、老眼鏡ごしに目を輝かせました。電気屋さんは、お茶でのどを潤しながら「ただひとつだけ、困ったことがあります」と言いました。

「夜の間は見られません。月が衛星放送の電波を邪魔してしまいますのでね」

よくばりな犬

森の奥で二匹のオオカミがにらみ合っていました。原因はひとかたまりの肉です。

「おれが見つけた」

「いや、おれが先に見つけた」

「おれのだ」

「いや、おれのだ」と、言い合いになったのです。

その様子を茂みのかげから犬がこっそりとのぞいていました。肝心の肉を草むらに放りだしたまま、オオカミたちはうなり合い、ののしり合い、とっくみ合いの大げんかを始めました。

お互いに相手の爪をかわし、かみつくのにも忙しくて、いつの間にか肉がなくなっていることには、まるで気がつきませんでした。

まんまと肉を横取りした犬は大急ぎで走って逃げました。オオカミたちに見つかったらたいへんです。肉どころか、自分も食べられてしまうにきまっています。犬は心臓をどきどきさせ、走って走って逃げました。

息がくるしいけれども、くわえた肉のおいしい汁が口のなかにじわっとひろがります。いつも我が物顔で森をのし歩いているオオカミたちを出し抜き、大きな肉を手に入れたのでうれしくてたまりません。ついつい、にんまりとしてしまいます。

しかし、犬は用心深く考えました。オオカミたちが後をつけてくるかもしれないぞ。

あたりを見回すと、なんとついているのでしょう。すぐそこに川が流れていますが、流れはゆるやかで、かんたんに渡れそうです。川を渡ってしまえばオオカミは追いかけて来られません。水は足跡の匂いを消してしまうので、さすがのオオカミも川を渡った獲物を追うことはできないのです。これでもう大丈夫。ほっとして、流れに足を踏み入れます。

ゆっくり流れている鏡のような水面をみて、思わず犬は立ち止まりました。

なんとそこには、大きな肉をくわえた見知らぬ犬がいて、こっちを見ているではありませんか。その犬がくわえている肉は、形といい大きさといい、それはそれはおいしそうです。犬の口の中にみるみるよだれがあふれ、のどがごくりとなりました。

「なんてうまそうな肉だ。オオカミを出し抜いたおれさまが脅せば、相手はふるえあがって、肉を置いて逃げていくだろう」

犬は思いきり怖い顔をして思いきり怖い声で、ひと声「わん」、と吠えました。とたんに自分の口から肉が転げ落ち、水に沈んでしまいました。

いがみ合っていたとはいえ、オオカミのするどい耳が犬の声を聞き逃すわけがありません。けれども犬は、沈んだ肉をいつまでも見ているのでした。

聖夜の魔法

イブの夜。

町の大通りのケーキ屋さんは大忙し。お店の奥で、粉やバターの重さを量ったり、たまごを数えたりするのが娘の仕事でした。黒髪を水色のリボンで束ね、くるくると働きます。まだ見習いの職人なので、ケーキを焼かせてはもらえないのです。

ようやくお店が閉まるころにはもうくたくたでした。早くうちへ帰って、ベッドに横になりたいと思いました。店の通用口を出ると、街灯の灯かりの届かない道端で、かさこそと何か動いています。近寄ってみれば枯葉の中に……

「まあ！ おもちゃのドラゴンだわ。なんてかわいいんでしょう」

手のひらに乗るような小さなドラゴンが背中の翼を力なくぱたりぱたりと動かしています。

「電池が切れかかっているのね」娘はコートのポケットにドラゴンを入れて大通りのバス停へ急ぎました。部屋に帰り、チキンとワインの遅い食事。すると、ハンガーにかけたコートのポケットがもぞもぞと動き、ドラゴンが首を出します。

「あらいけない、すっかり忘れていたわ」

電池を入れる場所を探してあちこちさわると、ドラゴンは翼と短い手足をばた

ばたさせました。そして口からぼつと火を吹いたのです。娘はびっくりしてドラゴンを取り落としました。食卓の上にひっくり返ったドラゴンは自分で起き上がり、高い声でこう言いました。

「我は魔法のドラゴンなり。闇夜を飛ぶうち、光の目つぶしを受けて空から落ちた。あまりの寒さに凍え死ぬところだった。助けてくれたことに礼を言うぞ」

態度には威厳があり、言葉づかいはおごそかです。けれども鼻はひくひく、目は食卓のケーキから離れません。ドラゴンのおなかがぐうと鳴りました。

「私が作ったの。どうぞ召し上がれ」娘が勧めると、ドラゴンは自分の体より大きいケーキをぺろりと一口で食べてしまいました。

「美味であった。礼を言うだけでは足るまい。そなたの望むものを述べてみよ」

娘はすっかり楽しくなって、それでは、と注文をつけました。「空を飛んでみたいわ」

そう言い終わったとたん、娘はドラゴンの背中で金や銀、青やピンクの色にきらめく街を見おろしていました。

「私の夢は、イブの街のようなクリスマスケーキをつくることなの。今はまだ見習いだけど、きれいなものをたくさん見て、きっと腕のいい職人になるわ。ああすてきな夜……」

娘が眠る窓の外、聖夜の三日月の前を魔法のドラゴンが飛んでいきます。その首に水色のリボンが結ばれ、後ろにたなびいているのです。

七人の妖精のぼうけん

庭で気持ちよさそうに咲いているあじさいを、藍（らん）くんは恨めしげに眺めています。何日も何日も雨が降っているのです。積み木もジグソーパズルも、何度もやって飽きました。ピアノに向かって音を出してみます。ドレミファソラシ。ピアノにも飽きました。

「つまんない」と、らんくんは口をとがらせます。

「ねえ、おかあさん、雨はいつやむの？」

「天気予報では、あと二日は降るでしょうって」

「ええっ？ 二日も？ やだよそんなの！ やだやだ！ つまんない！ つまんない！」

積み木をけとばし、パズルをひっくり返し、らんくんは大あばれ。しまいには、

「いいかげんにしなさい！」

叱られて、ふんだりけったりです。けれども、つまんない！ とあばれているうちに、二日が過ぎました。部屋には何日ぶりかの朝日が射し込んでいます。

ふとんをはねのけてとび起き、大急ぎでパジャマを脱いで服を着ます。頭には自分の名前と同じ、藍色のリボンのついた麦わら帽子をのせ、いそいそとくつをはきます。

「まあ！ らんくん、どこへ行くの？」台所のおかあさんはびっくり。「公園」

「朝ごはんを食べてからにしてください！」 「あとで食べる」

息を切らせて走って来ましたが、公園には誰もいません。朝日は昇ったばかりですし、たくさん降った雨で砂場はぐちゃぐちゃ、すべり台もびしょりとぬれています。いつも散歩に来るトイ・プードルのココもいないので、らんくんはがっかりです。

「ちえ！ みんなねぼすけなんだから！」

ぶつぶつと文句をいいながら、小高い丘に登ってみました。

丘の上は見晴らしがよく、公園全体がよく見えます。ちょっとうれしくなつて、なんでもいいから歌いたくなりました。「ラー」と大きな声を出すと、……公園のあちこちから子どもたちがやってくるのが見えました。見たことのない子たちです。女の子が三人、男の子も三人います。ひとり残らず麦わら帽子をかぶっているのが、らんくんは、ぼくとおんなじだぞ、と思いました。そして、それぞれ違う色のリボンを帽子につけていることに気がつきました。

らんくんのいる丘に登ってきて、集まった子どもたちは、顔を見合わせ、自己紹介が始まりました。

赤いリボンんの女の子が「わたしはド」、オレンジ色のリボンの子が「僕はレ」、「わたしはミ」、という具合です。

みんなの自己紹介を聞いているうちに、らんくんの番になりました。前の番の

子はソでしたから、じゃあ、「ぼくは、ラだ！」そして次の番の子はシでした。

みんなで手をつなぎます。なにが始まるのかな？ らんくんはドキドキしました。

「じゅんばんよ」と、まず赤いリボンの子がドの歌を歌います。次にオレンジの子がレの歌を、と次々に歌が重なっていきます。うまく歌えるかな？ らんくんがますますドキドキしていると、ソの歌を歌った子が、こんこんとせきこみました。「あたし、かぜをひいて、きのうまでねていたの」

ファの子が不服そうに言います。

「失敗しちゃったじゃないか。おまえのせいだぞ」

シの子が言います。

「だれのせいとかおかしいわ。私たちはみんなでひとつなんだから」

ファの子は「そうだった。ごめん」と謝りました。では、やり直しです。ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ。らんくんもうまく歌うことができました。

歌がそろると、みんなのリボンがきらきらとまぶしく輝きだします。らんくんは目も頭もくらくらして、びっくりしました。砂場やブランコ、町や川や橋が足の下にあるのです。

右隣りの子が「私たちはね」と言うと、左隣りの子が「虹になっているのよ」と言いました。「みんなでひとつなの」

つないだ右の手と左の手に力をこめて、ぎゅっと握ると、リボンはもっと鮮やかに輝きます。らんくんは思いきりラの歌を歌います。「ぼくも虹の仲間なん

だ！」

妖精たちの歌声は七色のアーチになって、大きく高く、空を超えていきました。

おわり

あとがき

童話的世界というだけありまして童話だけを集めてあります。以前（2014年頃）、某童話塾を受講し、その時の秀作……じゃなくて、習作の数々です。課題、条件なんかは次の通り。

「私はアプリーシャ」

あなたは「魔女」。人間の子どもたちが行っている小学校に入れられることになりました。クラスのお友だちに自己紹介をしてください。

「春の贈り物」

リボンの使い方について考えてみる。ひとつのリボンからおはなしを作る。

「月の夜想曲」

音楽を聴く。心に浮かんだ情景をまとめる。（イメージング-ピアノ曲。塾の著作権があると思うので紹介できませんが、音楽が聴こえてくるようなテキストを書いてみたいものです。）

「長い夜のすごし方」

「テレビ」を説明する。説明する相手は、テレビを見たことも触ったこともない。電気もガスもない場所に住んでいます。

「よくばりな犬」

イソップの「よくばりな犬」をリライトする。登場するもの、その性格、話の展開と結末を変えないこと。

【犬が肉をくわえて川を渡っていた。水にうつる自分の影を見たとき、大きな肉をくわえた別の犬がいると思った。別の犬の肉を奪おうと吠えたので、くわえていた肉が川に落ち

て、よくばりな犬は自分の食べ物をなくしてしまった。】

「聖夜の魔法」

四つの言葉を使い、掌編童話を書いてみる。キーワードは、ドラゴン 娘 リボン 町の大通り

「七人の妖精のぼうけん」

自由課題 卒業制作

某塾のテキストを隅々まで勉強したか、というのですね。課題をこなし、卒業するというとりあえずの目的のためには、とりあえず、勉強しました。その際に残したものを残しておこうと思いついて一度はHPを作り、別の形でも残しておこうと電子書籍を作ったわけです。

そこで改めて塾テキストをひも解いてみると……なかなか興味深い。今更感ももう要らない感もなく。

長編小説がメインディッシュなら童話はデザートのようなもの、とE・T先生は（え〜地球外生命体ではありません。単にイニシャルであります）おっしゃっているけれども、それは体裁、外見、そして読み込む時間、読後感であって、素材を選び、世界を構築していくという作業において長編も童話も変わらない。長編を凝縮して凝縮して味付けや表現を変えてシンプルな童話にすることもできれば、逆のことも可能なのだと思いました。大事なものは、本質は何か、です。

ひとつの話を作り上げるにはいろいろなアプローチの方法があります。言葉だったり、絵だったり、音楽だったり。それらが作品の素材であることもあれば、こういうイメージの作品を、という注文であることもあります。

印刷物にはたいてい字数の制限というものがあって、webサイトや自作の電子書籍にはい

らないかなと思い、取っ払ってしまいましたが、上記の課題にはすべて、何文字程度、あるいは、原稿用紙何枚といった条件がついていました。そのあたりから学んだのは、できるかぎり少ない文字数で、効果的なイメージを生む言葉を選ぶということでした。そうやってイメージを膨らませ、絞って、ようやくキーボードに触って最初の一文字を打ち込みます。ぽん、と。

ひととおり書き上がったのをやれやれと眺め、そこから削って削って削りまくります。だいたい、長い、のですよ(笑)

せっかく書いたのにもったいないと思いつつ、必要なものだけを残す。泣く泣くの作業を通して初めて人さまの目にふれて構わないものができあがるのだよと、自戒を込めて。

初版には挿絵が入っていたのですが……文章からイメージを膨らませていただくには無い方がいいだろうということで、第二版からは外しました。

アプリーシャの切り絵を提供くださったtukuさまには心からお礼申し上げます。

なお、切り絵は[こちら](#)からご覧いただけます。

さいごまでお読みくださってありがとうございました。お楽しみいただけましたら幸いです。

2020年 8月18日 峯村 明

童話的世界

2020年 8月 第二版発行

著者 峯村 明

表紙素材 「仮想迷宮」 <http://www.tranet.org/rabyrinth/>

表紙構成 峯村 明

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
